慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリ

Report of 2019

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開　設：2012 年 3 月 1 日
代表者：武田　祐子（看護医療学部 学部長）
連絡先：慶應義塾大学看護医療学部

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス）に不可欠である、(1）看護実践の質保証 (Quality）を推進する実践研究開発、(2）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility）できる看護リーダーの養成、(3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore）、をめざすものである。

■メンバー

武田　祐子	（看護医療学部　学部長）	ラボラトリ・リーダー　遺伝看護実践研究開発
小松　浩子	（看護医療学部　教授）	がん看護実践質保証研究開発
野末　聖香	（看護医療学部　教授）	精神看護実践研究開発
宮脇　美保子	（看護医療学部　教授）	倫理的看護実践研究開発
永田　智子	（看護医療学部　教授）	倫理的看護実践研究開発
深堀　浩樹	（看護医療学部　教授）	高齢者看護実践研究開発
小池　智子	（看護医療学部　准教授）	ベストプラクティス先導ナース開発研究
矢ヶ崎　香	（看護医療学部　准教授）	がん看護実践質保証研究開発
福井　里佳	（看護医療学部　准教授）	倫理的看護実践研究開発
福田　紀子	（看護医療学部　准教授）	精神看護実践研究開発
朴　順禮	（看護医療学部　専任講師）	看護実践研究開発
新幡　智子	（看護医療学部　専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
山本　亜矢	（看護医療学部　専任講師）	倫理的看護実践研究開発
石川　志麻	（看護医療学部　専任講師）	看護実践研究開発
門脇　緑	（看護医療学部　助教）	がん看護実践質保証研究開発
田村　紀子	（看護医療学部　助教）	がん看護実践質保証研究開発
本田　晶子	（看護医療学部　助教）	がん看護実践質保証研究開発
浅川　翔子	（看護医療学部　助教）	看護実践研究開発
一条　由香	（看護医療学部　助教）	看護実践研究開発
田久保美千代	（看護医療学部　助教）	精神看護実践研究開発
吉永　新子	（看護医療学部　助教）	精神看護実践研究開発
平尾　美佳	（看護医療学部　助教）	高齢者看護実践研究開発
小林　良子	（看護医療学部　助教）	倫理的看護実践研究開発
松嵜　愛	（看護医療学部　助教）	倫理的看護実践研究開発
木下　ユリコ	（看護医療学部　助教）	倫理的看護実践研究開発
加藤　由希子	（看護医療学部　助教）	看護実践研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることにも力を注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス）に不可欠である、（1）看護実践の質保証 (Quality）を推進する実践研究開発、（2）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility）できる看護リーダーの養成、（3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore）、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の３つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボラトリの主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボラトリの根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者の QOL の向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探求する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

1.「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト
1）経口抗がん薬治療を受ける患者のアドヒアランスに関するケアの開発（RCT）
2）化学療法の副作用症状（末梢神経障害、手足症候群）に関わるリスクイベント（転倒）や QOL に関する研究
2. 分子標的治療に伴う皮膚障害（ざ瘡様皮疹等）に関する研究
3. 地域在住超高齢者（95 歳以上）の世界観：質的研究

小松　浩子　　慶應義塾大学看護医療学部　教授
矢ヶ崎　香　　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

がん患者中心の最善のケアの提供を目指し、看護実践の開発、実践への適用、普及を推進する。さらに百寿者を対象とした共同研究を推進し、超高齢者社会が進む日本から成果を発信する。

B. 計画および実施過程

1.「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト

1）多施設共同研究による「経口抗がん薬の服薬自己管理支援プログラムの有効性：ランダム化比較試験と質的研究による Mixed Method」の論文を作成し投稿する。

2）-1 化学療法誘発性末梢神経障害のある乳がん患者の転倒リスクに関する量的研究について論文を投稿する。

2）-2 がん化学療法に伴う末梢神経障害のある患者を対象にした転倒予防 e- ケア開発に関する研究は、モバイルウエラブルデバイスを用いたデータ収集を開始し、末梢神経障害のある患者の転倒の実態を解明する。

2. 分子標的治療に伴う皮膚障害（ざ瘡様皮疹等）に関する質的研究の論文の採択を目指す。

3. がん治療中のフレイルな高齢者を対象にした食生活に関する支障とニーズを明らかにするための質的研究を計画し、倫理審査承認後にデータ収集を開始する。

4. 地域で暮らす百寿者を対象に日常生活を通しての自立の体験に関する調査（質的研究）を計画し、倫理審査承認後にデータ収集を開始する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1.「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト

1）「経口抗がん薬の服薬自己管理支援プログラムの有効性：ランダム化比較試験と質的研究による Mixed Method」は解析を終え、論文を投稿した。現在、査読中である。

2）-1　末梢神経障害に伴う乳がん患者の転倒リスクに関する量的研究の論文は採択、掲載された。

2）-2　がん化学療法に伴う末梢神経障害のある患者より転倒、転倒未遂の調査は現在、データ収集および中間解析を進めている。

2. 分子標的治療に伴う皮膚障害（ざ瘡様皮疹等）に関する調査の結果は論文は採択、掲載された。

3. 高齢がん患者を対象にしたインタビュー調査は倫理審査で承認を得て、データ収集を開始し、9 名のインタビューを行った。引き続き調査を進める。

4. 全国の百寿者は限られており、データ収集は 2 年計画で進めている。今年度は 4 名 (104 － 111 歳）インタビューを行った。引き続き調査を進める。

2．今後の課題、展望

今後も他の専門分野の研究者と共同し、患者（当事者）や臨床実践および地域社会に貢献できる研究を遂行する。

3．2019 年度の業績

【学術論文】

1. Hiroko Komatsu, Kaori Yagasaki, Yasunori Sato, Harue Arao, Sena Yamamoto, Tetsu Hayashida. Evaluation of the Japanese Version of the Cancer Survivors' Unmet Needs Scale. Asia?Pacific Journal of Oncology Nursing. (in press).

2. Yagasaki K, Takahashi H, Ouchi T, Yamagami J, Hamamoto Y, Amagai M, Komatsu H. Patient voice on management of facial dermatological adverse events with targeted therapies: a qualitative study. J Patient Rep Outcomes. 2019;3(1):27. doi: 10.1186/s41687-019-0116-3.

3. Komatsu H, Yagasaki K, Komatsu Y, Yamauchi H, Yamauchi T, Shimokawa T, Doorenbos AZ. Falls and Functional Impairments in Breast Cancer Patients with Chemotherapy-Induced Peripheral Neuropathy. Asia Pac J Oncol Nurs. 2019;6(3):253-260. doi: 10.4103/apjon.apjon_7_19.

生体センサを活用した心不全患者のための「こころと眠りの支援プログラム」開発と評価

野末　聖香　慶應義塾大学看護医療学部　教授
福田　紀子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
田久保美千代　慶應義塾大学看護医療学部　助教
久保　美紀　慶應義塾大学看護医療学部　訪問准教授
河野　隆志　慶應義塾大学病院循環器内科
白石　泰之　慶應義塾大学病院循環器内科
中野　直美　慶應義塾大学看護医療学部

A. 目標

本研究は、心不全患者の睡眠とうつ・不安に焦点をあて、生体センサを用いた「こころと眠りの支援プログラム」を開発し、効果検証することを目的とする。

B. 計画および実施過程

2019 年度は、心不全患者を対象に、身体状態、睡眠状態、精神状態（うつ・不安）、日常生活のセルフケア、ストレス対処に関する実態調査を継続実施した。また、心不全患者が睡眠と心の健康を自己管理するための生体センサの選定と、モニタリングシステムの構築を目指した。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

心不全と診断され循環器内科に通院中の 75 才以下の患者を対象とした横断研究デザインによる質問紙調査を実施した。対象者数確保のため 2019 年度には研究フィールドを 2 カ所とした。調査の概念枠組みとして、①身体状態（心不全の状態）、②精神状態（不安・うつ）、③睡眠状態（質と量および睡眠障害の重症度）、④生活の質、⑤セルフケア（心不全の自己管理、睡眠やストレスへの対処）を構成概念とした。年度末時点で約 100 名からデータを収集しており、今後心不全患者のこころ、身体、睡眠の特徴と、これらの関連について分析する。

また生体センサの選定を開始した。センサによって収集するデータの検討、センサとしての妥当性や使い心地などの検討を始めたところである。

生体センサの選定については複数のセンサを試用し、最終的にベッドマットタイプのセンサを使用することとし、データの集約方法を検討している。

2. 今後の課題、展望

質問紙調査は 150 名を目標に継続実施し、今年度中に分析結果について論文投稿する予定である。また、ベッドマット型生体センサによる睡眠モニタリングについては、まず健康な対象者に施行してシステムを構築する。さらに、質問紙調査の分析結果を踏まえ、心不全患者を対象とした心と眠りの支援プログラムを開発し、2020 年度中に、心不全患者を対象とした feasibility study のための研究倫理審査申請を行う予定である。

遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究

武田　祐子　　慶應義塾大学看護医療学部　　教授

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、QOL 向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

1）　がん看護専門看護師を対象とした遺伝リテラシー向上のための教育プログラムの開発（研究代表者：村上好恵　東邦大学）

2）　消化管良性多発腫瘍好発疾患の医療水準向上及び均てん化のための研究（研究代表者：石川秀樹　京都府立医科大学）

3）　ゲノム医療従事者の育成プログラム開発（A-3 班）（研究代表者：豊岡伸一　岡山大学）

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1）　海外における家族性腫瘍を対象とした遺伝カウンセリングに関する文献検討より【遺伝学的検査の受検行動への影響・関連要因】,【遺伝カウンセリングに関するスクリーニングシステム , 教育システムの有用性の検証】,【遺伝カウンセリングの有用性の検証】,【遺伝カウンセリングの内容】についての実態を明らかにした。

2）　Peutz-Jeghers 症候群、Cowden 症候群、若年性ポリポーシス症候群について、Minds に準拠したシステマティックレビューを実施し、診療ガイドライン（案）を作成した。

3）　看護師を対象としたがんゲノム医療に関連した講習会を実施し、がんゲノム医療中核拠点病院で役割を担う看護師に対して、現状と課題に関するフォーカスグループインタビュー調査を実施した。

2. 今後の課題、展望

1）　研究成果に基づき、引き続きがんゲノム医療に対応するがん看護専門看護師育成のための介入研究を計画している。

2）　３疾患の診療ガイドライン作成の最終段階に入っており、日本遺伝性腫瘍学会雑誌「遺伝性腫瘍」に投稿を予定している。

3）　日本医療開発機構（AMED）事業終了にあたり、継続的に拠点病院等での教育の実施を可能とするツール「がんゲノム医療と看護（冊子）」を作成した。https://genomicx.net/data/gmsn_20200331.pdf

3. 2019 年度の業績

1. 武田 祐子（2019）がんゲノム医療の現状と課題～その人らしさを支えるための個別化医療～　がんゲノム医療における人材育成と看護への役割期待 , 日本がん看護学会誌 33 巻 Suppl. Page114

2. 村上 裕美 , 佐藤 智佳 , 武田 祐子 , ほか日本遺伝カウンセリング学会遺伝看護委員会（2019）遺伝看護セミナー「がんと遺伝をめぐる診療と看護」2017 年度、2018 年度の実施から見た今後の課題 , 日本遺伝カウンセリング学会誌 40 巻 2 号 Page163

3. 武田 祐子（2019）「ヒトの遺伝」リテラシー向上への社会実装の現状と課題　非遺伝専門医療職の「ヒトの遺伝」リテラシー　卒後の人材育成の立場から , 日本遺伝カウンセリング学会誌 40 巻 2 号 Page54

4. 高嶺 恵理子 , 青木 美紀子 , 小笹 由香 , 武田 祐子 , ほか（2019）がんゲノム医療実装に向けた看護師教育の取り組み , 日本遺伝カウンセリング学会誌 40 巻 2 号 Page167

5. 武田 祐子（2019）【ゲノム医療とがん看護】がんゲノム医療の現状と課題 , 看護 71 巻 10 号 Page68-70

6. 武田 祐子（2019）ゲノム医療の急速な発展に看護はどう臨むか , 日本看護科学学会学術集会講演集 39 回 Page [NA-02]

7. 武田 祐子（2019）緩和ケアの場で必要な遺伝性腫瘍の知識と遺伝カウンセリング　（第 2 回）　遺伝性腫瘍とは何か , エンド・オブ・ライフケア 3 巻 5 号 Page69-73

8. 今井芳枝 , 宮本容子 , 吉田友紀子 , 村上好恵 , 川崎優子 , 武田祐子 , ほか（2020）遺伝性腫瘍に関する遺伝カウンセリングの動向 . 四国医学雑誌 76 巻 1.2 号

【関連する社会的活動】

1. がんゲノム医療コーディネーター研修会：厚生労働省委託事業　養成委員会委員 , 講師（第 1 回 2019 年 6 月（東京）, 第 2 回 2019 年 6 月（東京）, 第 3 回 2020 年 2 月（大阪）　⇒中止）

2. 看護師のためのがんゲノム勉強会：AMED ゲノム創薬基盤推進研究事業　企画・講師（2019 年 7 月（東京）,2019 年 11 月（東京））

3. 第 22 回家族性腫瘍セミナー：日本家族性腫瘍学会主催　企画・実行委員 , 講師（前期 2019 年 8 月（東京）, 後期 2020 年 3 月（東京）⇒延期）

老年看護における Evidence Based Practice の促進に関する研究

深堀　浩樹　　慶應義塾大学看護医療学部　　教授

A. 目標

老年看護において科学的根拠に基づく実践（Evidence Based Practice）を促進することにつながる研究活動を行う。

B. 計画および実施過程

上記の目標に沿う活動として、システマティックレビュー、量的・質的研究、事例研究を実施し、論文発表を行った。その他、国内の看護職者（研究者・実践家）に対する啓発を目的として国内の学会誌や看護職向けの商業誌での記事の執筆も行った。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

日本語論文 1 件、英語論文 9 件を公表し、国内の学会誌・商業誌に 8 件の記事を執筆することができた。臨床看護師との共著論文・記事の執筆を複数行うことができた。公表された論文のうち、Hirooka et al (2020) は掲載誌を発行している Wiley 社の Research Headlines に掲載され国内外で注目を集めたため、プレスリリースを行った（https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/files/2020/3/12/200312-1.pdf）。健康上の意思決定に有益な質の高いエビデンスをまとめている団体である Cochrane Database Syst Rev においてシステマティックレビューの公表を行うことができた。

2. 今後の課題、展望

看護・医療・福祉領域における臨床実践の質の向上に寄与し、社会的にもインパクトのある研究成果を公表できるように努めていく。

3. 2019 年度の業績

1. Higuchi A, Takita M, Yoshii A, Akiyama T, Nemoto T, Nakahira R, et al. Absence of Relatives Impairs the Approach of Nurses to Cardiopulmonary Resuscitation in Non-Cancer Elderly Patients without a Do-Not-Attempt-Resuscitation Order: A Vignette-Based Questionnaire Study. Tohoku J Exp Med. 2020;250(1):71-8.

2. Hirooka K, Fukahori H, Taku K, Izawa S, Ogawa A. Posttraumatic growth in bereaved family members of patients with cancer: a qualitative analysis. Support Care Cancer. 2019;27(4):1417-24.

3. Hirooka K, Nakanishi M, Fukahori H, Nishida A. Impact of dementia on quality of death among cancer patients: An observational study of home palliative care users. Geriatr Gerontol Int. 2020.

4. Nasu K, Konno R, Fukahori H. End-of-life nursing care practice in long-term care settings for older adults: A qualitative systematic review. Int J Nurs Pract. 2019:e12771.

5. Nasu K, Sato K, Fukahori H. Rebuilding and guiding a care community: A grounded theory of end-of-life nursing care practice in long-term care settings. J Adv Nurs. 2020;76(4):1009-18.

6. Nishikawa Y, Hiroyama N, Fukahori H, Ota E, Mizuno A, Miyashita M, et al. Advance care planning for adults with heart failure. Cochrane Database Syst Rev. 2020;2:CD013022.

7. Okumura-Hiroshige A, Fukahori H, Yoshioka S, Nishiyama M, Takamichi K, Kuwata M. Developing a Measure of End-of-Life Care Nursing Knowledge for Japanese Geriatric Nurses. J Hosp Palliat Nurs. 2019;21(4):E1-E9.

8. Okumura-Hiroshige A, Fukahori H, Yoshioka S, Nishiyama M, Takamichi K, Kuwata M. Effect of an end-of-life gerontological nursing education programme on the attitudes and knowledge of clinical nurses: A non-randomised controlled trial. Int J Older People Nurs. 2020:e12309.

9. Tomotaki A, Fukahori H, Sakai I. Exploring sociodemographic factors related to practice, attitude, knowledge, and skills concerning evidence-based practice in clinical nursing. Jpn J Nurs Sci. 2020;17(1):e12260.

10. 花田美里 , 赤井畑明里 , 長尾祥子 , 廣山奈津子 , 瀬戸菜月 , 深堀浩樹 .【臨床実践を研究につなげる「ケアの意味を見つめる事例研究」に臨床の現場で取り組む】事例研究の実際　安静指示のある脊椎疾患患者に提供された「あうんの呼吸」による看護　安静保持が難しい患者の事例から . 看護研究 . 2019;52(4):254-63.

11. 金盛琢也 , 酒井郁子 , 山川みやえ , 深堀浩樹 , 石川容子 , 森山祐美 , et al. 老年看護政策検討委員会活動報告　外来診療における認知症患者に対する看護師の役割に関する展望 . 老年看護学 . 2019;24(1):87-91.

12. 深堀浩樹 .【臨床実践を研究につなげる「ケアの意味を見つめる事例研究」に臨床の現場で取り組む】「ケアの意味を見つめる事例研究」を臨床看護研究の中で行なうことの意義　外部の共同研究者・支援者の立場から . 看護研究 . 2019;52(4):248-53.

13. 深堀浩樹 . 指導教員の立場から　大学院生の国際学会発表を促進するために　指導教員としての経験が浅い時期の試行錯誤を振り返って . 看護研究 . 2019;52(5):330-6.

14. 真志田祐理子 , 深堀浩樹 , 太田喜久子 . 大腸切除術後に老いを生きる後期高齢者の生活の変化とその対応 . 日本看護科学会誌 . 2019;39:278-87.

15. 平田三奈 , 戸田あゆみ , 廣山奈津子 , 山縣千尋 , 西川裕理 , 深堀浩樹 . 知的障害者の家族の課題と支援に関する質的研究の文献検討 . 小児看護 . 2019;42(9):1183-9.

16. 友滝愛 , 津田泰伸 , 深堀浩樹 . はじめに エビデンスやデータに基づくケアの質改善 : 専門看護師の活動を紐解き現場に活かそう（特集「看護研究」を問い直す :" 現場主体の質改善 " を目指すマネジメント）--(事例紹介）. 看護管理 . 2019;29(3):227-9.

17. 友滝愛 , 津田泰伸 , 深堀浩樹 . 特集のまとめ 臨床看護師の「看護研究」を「ケアの質改善」につなげるための提案（特集「看護研究」を問い直す :" 現場主体の質改善 " を目指すマネジメント）. 看護管理 . 2019;29(3):252-4.

18. 友滝愛 , 津田泰伸 , 深堀浩樹 . 看護研究の何を問い直すのか ?: 研究の目的と研究を推進する組織文化（特集「看護研究」を問い直す :" 現場主体の質改善 " を目指すマネジメント）. 看護管理 . 2019;29(3):209-13.

1. がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者教育プログラムの開発
2. 産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究

大坂　和可子　慶應義塾大学看護医療学部　　准教授

A. 目標

医療に関連する意思決定支援の充実、標準化を目指し、患者、家族、医療者が共有できる意思決定支援ツールの開発方法と活用方法の普及 , 実装の促進につながる研究活動を行う。

B. 計画および実施過程

1. がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラム開発
   1）意思決定支援ツールを開発し活用するための教材作成を進める。
   2）教材および開発したディシジョンエイドの公開に向けウェブサイト作成を進める。
2. 産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究の一部として、産科医療施設の医療者および妊娠中の女性を対象とした共有意思決定支援の現状に関する調査として、質問紙調査を実施する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1. がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラム開発
   1）教材作成中である。
   2）ウェブサイト作成中である。
2. データ収集中である

2．今後の課題、展望

がん患者向けのディシジョンエイド開発と活用のための医療者育成プログラム開発では、作成した教材についてディシジョンエイド開発経験のある医療者を対象としたヒアリングを行い、教材の洗練とプログラム開発を行う。産科医療施設における共有意思決定教育に関する研究では、質問紙調査結果の分析を進めインタビュー調査を行う。また共有意思決定教育の介入プログラム研究の準備を進める。

3．2019 年度の業績

【受賞】

2020 年度日本がん看護学会学術奨励賞研究部門受賞（共著論文）

受賞論文 - 鈴木 久美 , 大畑 美里 , 林 直子 , 府川 晃子 , 大坂 和可子 , 池口 佳子 , 小松 浩子．乳がん早期発見のための乳房セルフケアを促す教育プログラムの効果．日本がん看護学会誌，2018；32:12-22.

【論文】

1. Jull J, Köpke S, Boland L, Coulter A, Dunn S, Graham ID, Hutton B, Kasper J, Kienlin SM, Légaré F, Lewis KB, Lyddiatt A, Osaka W, Rader T, Rahn AC, Rutherford C, Smith M, Stacey D. Decision coaching for people making healthcare decisions. Cochrane Database of Systematic Reviews 2019, Issue 7. Art. No.: CD013385. DOI: 10.1002/14651858.CD013385.

2. 藤田美保 , 米倉佑貴 , 大坂和可子 , 中山和弘 . ディシジョン・エイドの質基準から見た説明文書の現状と課題：治験関係者へのインタビュー調査を含めて . 臨床薬理 . 2019; 50(6): 247-257.

3. 大坂和可子 , 青木頼子 , 江藤亜矢子 , 北 奈央子 , 有森直子 , 中山和弘 . 意思決定の葛藤をアセスメントするスクリーニングツール SURE test 日本語版の開発 ―言語的妥当性を踏まえた翻訳版の作成―. 日本看護科学学会誌 . 2019; 39: 334-340.

【学会発表】

1. Shishido E, Henna A, Osaka W, Arimori N, Horiuchi S. Development of a decision aid for pregnant women about analgesia before childbirth. 10th International SHARED DECISION making conference. Quebec, 8th July 2019.

2. 平安名 彩恵 , 宍戸 恵理 , 大坂 和可子 , 堀内 成子 . 自然分娩・無痛分娩を選択する女性への意思決定エイド 国際基準に合わせたエイド開発までの道のり . 第 60 回日本母性衛生学会学術集会 , 2019 年 9 月，千葉県浦安市.

3. 宍戸 恵理 , 大坂 和可子 , 有森 直子 , 堀内 成子 . 自然分娩か無痛分娩かの選択に迷う妊婦を支援する意思決定エイド . 第 34 回日本助産学会学術集会 , 2020 年 3 月，新潟.

【その他】

1. 大坂和可子：「医療者と一緒に治療を選ぶ時のコツ」講師，市民公開講座「がんと共に生きる時代の治療選択のヒント～放射線治療を中心に～」(神奈川新聞社、バリアン株式会社共催), 2019 年 5 月 11 日 , 横浜.

2. 大坂和可子：「多様化する乳がん治療における患者中心の意思決定支援」第 57 回日本癌治療学会学術集会ブースセミナー講師（第 57 回日本癌治療学会学術集会 , ファイザー株式会社共催), 2019 年 10 月 26 日 , 福岡.

3. 大坂和可子：Shared Decision Making in IBD 2019 ファシリテーター（ヤンセンファーマ株式会社メディカルアフェアーズ本部 , 田辺三菱製薬株式会社育薬本部　共催), 2019 年 12 月 8 日 , 東京.

レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス（Mindfulness for health professionals building resilience and compassion：MaHALO プログラム）の開発

朴　順禮　　慶應義塾大学看護医療学部　　専任講師

A. 目標

がん患者および家族、医療従事者への効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へ心のケアの実践と普及を目指す。

B. 計画および実施過程

1）医療従事者へのマインドフルネスプログラムの開発
2）マインドフルネスに関する教育・普及活動

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）　レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス Mindfulness for Health professionals building Resilience and Compassion: MHALO プログラムの効果研究―無作為化試験―の開始

MHALO プログラムの効果検証の目的で、RCT による研究を実施した。現在詳細なデータを分析中で、今後学会発表および論文投稿の準備を進めている。

2）　セミナーおよびワークショップ等の実施

2．今後の課題、展望

医療従事者への MHALO プログラムの開催・フォローアップの実施を進めると共に、マインドフルネスを活用したがん患者への更なる応用を目指す。

3．2019 年度の業績

【論文】

・Akira Ninomiya , Mitsuhiro Sado ,Sunre Park,Daisuke Fujisawa ,et al.　Effectiveness of Mindfulness-Based Cognitive Therapy in Patients With Anxiety Disorders in Secondary-Care Settings: A Randomized Controlled Trial. Psychiatry Clin Neurosci, 74 (2), 132-139.2020.

・Mitsuhiro Sado , Teppei Kosugi , Akira Ninomiya , Maki Nagaoka , Sunre Park,et al. Effectiveness and Cost Effectiveness of Mindfulness-Based Cognitive Therapy for Improving Subjective Well-Being Among Healthy Individuals: Study Protocol for a Randomised Controlled Trial. JMIR Res Protoc.(Online ahead of print).

・Sunre Park , Yasuko Sato , Yuka Takita, Daisuke Fujisawa, et al. Mindfulness-based Cognitive Therapy for Psychological Distress, Fear of Cancer Recurrence, Fatigue, Spiritual Wellbeing and Quality of Life in Patients With Breast Cancer - A Randomized Control Trial. J Pain Symptom Manage,2020(Online ahead of print).

【著書】

・朴　順禮著、恒藤　暁、田村　恵子編著 「系統看護学講座別巻緩和ケア：第 9 章医療スタッフのケア」p.256-264.2020. 医学書院 .

【その他】

・第 67 回患者サロン「がん患者さん・家族の心のケア～マインドフルネスを活かす～」講師 . 慶應義塾大学病院 .2019 年 5 月

・第 2 回日本 GRACE 研究会総会「GRACE の基本に立ち返り、コンパッションに触れる」企画・総合司会・ファシリテーター関西大学 .2019 年 12 月

「先導ナースの養成プログラム」の開発・検証

小池　智子　　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

本部門は、看護サービスの開発・質改善を担う「ベストプラクティス先導ナース」に必要な力を高めるため「ベストプラクティス推進プログラム」、「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」を運営し、①プログラム改訂・教材の開発、②プログラムによる教育・提供を研修の提供、③効果の検証、④成果の発信を行う。

さらに、医療勤務環境の改善等の医療マネジメントに、行動経済学や行動科学等による知見（ナッジ等）を活用した方策の開発、検証を行なう。

B. 計画および実施過程

1.　ベストプラクティス推進プログラムの運営

①組織が置かれている外部環境および自組織の内部環境の分析を踏まえ、ビジョンと戦略を明らかにする。②課題の現状分析と要因分析を行い、施設内外の優れた実践例（ベストプラクティス）等も参考に複数の改善策を比較検討し、実施計画を立案し、③適切な目標・評価指標を設定し、プロセス評価・アウトカム評価を行う。医療機関の部署等において約 1 年をかけて①～③を実施し活動評価を行った。高い成果を達成した活動については、④標準化・定着を図り、期待した成果が得られなかった、あるいは不明な活動については、改善点を明らかにして、次年度の活動に継続し、改善が図られるようにした。

2.　ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム

これまでに作成したケース教材を改定した他、今日的な看護マネジメント課題を素材にしたケース教材を開発し、授業・研修で用い、授業・研修の効果を評価した。なお、SFC 研究所ケースメソッド・ラボのメンバーとして看護分野のケース作成に参画している他、「ケースとデータに基づく病院経営人材育成」（文部科学省課題解決型人材養成プログラム）の病院経営ケース作成タクスフォースの委員として、ケース作成を行っている。

3.　医療勤務環境改善に資する Nudge 開発

公益財団法人大原記念労働科学研究所「医療勤務環境改善マネジメントシステム研究会」の研究活動グループとして、医療勤務環境の改善に資する Nudge 事例の収集を目的に「医療勤務環境改善ナッジ・ユニット」を立ち上げ活動を行なってきた。

更にこれを発展させて 2019 年 12 月「行動経済学、行動科学、心理学等の知見を活用し、医療・介護領域の勤務環境の改善に資する研究・調査を進め、改善方法の開発・発展・普及に貢献すること、さらに、内外の学術団体とも協力し、これにより学術と産業安全保健の発展に寄与すること」を目的に「医療・介護勤務環境改善ナッジ研究会」を設立した。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1)「ベストプラクティス推進プログラム」の実施と評価

2 医療機関で改定した研修プログラムを実施した。計 21 の職場（病棟・外来・手術室）が約 8 ヶ月～ 1 年間にわたり、医療安全・感染管理・看護の質改善（ケア提供システム改善・標準化等）・労働安全衛生・入退院支援等に関する質の改善活動に取り組んだ。各職場の活動評価（中間・成果発表、成果資料）を看護部長・教育担当の看護管理者等と質的に分析し結果、①プロセス評価・アウトカム評価が適切に行なわれ、活動と成果の可視化が促進された、②看護単位内だけでなく、外来部門、多職種部門と連携をすることによって、より効果的に問題解決を図るケースが増加してきた、③各看護単位において質改善のモデル・手法が定着ており、質改善活動が継続的に実施され職場文化となってきた、④本プログラムの活動を通してリーダーシップ力が育成されている等の効果が確認された。

2)「ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム」の実施と評価

2019 年度は新たに意思決定、リーダーシップに関するケース教材を 2 ケース作成した。また、ケースこれまでに開発したケース教材について、医療制度改革・診療報酬改定等の医療環境の変化を反映した内容に改定した。

以下の教育機関等で研修プログラムを実施した。前年度より参加機関が 3 機関増加した。

【2019 年度ケースメソッド教育実施大学・機関等】

・学部教育：慶應義塾大学看護医療学部「移行期看護」

・大学院教育：慶應義塾大学健康マネジメント研究科「看護管理論」「看護政策論」、神戸大学大学院保健学研究科 / 保健師コース「公衆衛生看護管理論」、島根県立大学大学院「看護学研究科セミナー」

・現任教育：認定看護管理者研修課程：東京都看護協会（セカンド）、神奈川県看護協会（セカンド）、兵庫県看護協会（サード）、茨城県看護協会（セカンド）、岩手県看護協会（ファースト、サード）、秋田県看護協会（サード）、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）・認定看護管理者研修課程（サード）、

授業・研修終了後、授業計画と授業評価（時間構成、発言数・時間）、受講者評価（内容方法、習得・達成内容等）を分析し、①問題の原因分析力、②解決策を比較検討する統合力、③説明力を総合的に評価した。看護管理経験がある群は、「②解決策を比較検討する統合力」が高かったが、「①問題の原因分析力」と「③説明力」については、看護管理経験よりも、ケースの理解と自己学習におけるケース検討・分析への取り組みの程度とグループディスカッションの質が影響していた。

3）医療勤務環境改善に資する Nudge の開発 研究・教育

「医療・介護勤務環境改善ナッジ研究会」を設立し、行動経済学・行動科学等の行動インサイトの知見を活用し、医療機関・介護施設の職場をよりよくするための仕掛け・システムの開発・研究・教育を開始した。第 1 回研究大会（2019 年 12 月 1 日開催）では、2 つの教育講演、1 つのシンポジウムを開催し、行動経済学や心理学等の行動インサイトを用いた取り組みを紹介し、医療・介護現場での活用の方法と働き方改革における職場の問題解決の選択肢のひとつとしての可能性についてディスカッションを行なった。第 1 回研究大会には、医師・看護師・薬剤師・歯科医師等の医療関係者、社会保険労務士、医療コンサルタント、医療・介護関連企業担当者、自治体職員、NPO 職員、大学教員、大学院生・学部生など計 136 名が参加した。

医療・介護現場の働き方改革が課題になっている最中、従来のベストプラクティスを踏襲する方法だけではなく、行動インサイトやデザインを活用した問題解決の考え方とその実践例は、参加者が新たな選択肢を得る機会となった。また、医療・介護現場の従事者だけではなく、勤務環境改善のコンサルテー

ションをしている社会保険労務士や、職場改善への貢献を考えている企業や自治体の担当者等も多く参加し、新しい改善の仕掛けをつくるための交流の場が生まれたのも成果である。

2．今後の課題、展望

「ベストプラクティス推進プログラム」と「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」は、継続して実施し、効果の検証と普及を行う。「医療勤務環境改善に資する Nudge 開発」においては、医療安全対策・感染対策も含めて行動インサイトやデザインを活用した問題解決の開発研究と普及をすすめていく予定である。

3．2019 年度の業績

【書籍】

【関連論文】

1） 小池智子（2019）：テクノロジーがひらく新しい看護の世界 , 看護展望 44(1）p10-16.
2） 小池智子（2019）：ナッジの活用 - 看護現場をよりよくする仕掛け , 看護 71(15）p70-76.
3） 小池智子（2020）：未来の看護に貢献する「構想力」を鍛える , 看護管理
4） 小池智子（2020）：先端テクノロジー , Expert Nurse 36(4）P91-99.

【関連学会発表等】

5） 小池智子（2019）：看護の政策提言に必要な研究と看護管理者の役割（公益社団法人日本看護協　神戸研修センター認定看護管理者が担う政策提言の実際と政策力強化に向けた取り組み研修)、(2019.7.25 神戸）
6） 小池智子（2019）:地域包括ケア時代のチーム医療と看護マネジメント、医療･病院管理研究協会「看護管理者ミドルマネジメント研修」、(2019.8.9, 東京）
7） 小池智子（2019）：ケースメソッド教授法：看護学教育への活用 , 島根県立大学大学院第 5 回看護学研究科セミナー（2019.8.10）
8） Tomoko Koike（2019）.Aging populations: Lessons in healthy aging from Japan, Conference of University of Suffolk, (2019.9.4, Ipswich, UK）
9） 小池智子 , 酒井一博 , 水野基樹 , 伊藤清子 , 加藤明子(2019)：ナッジで促進する「医療労働環境改善」, 第 23 回日本看護管理学会学術集会・インフォメーションエクスチェンジ（新潟市）
10） 小池智子（2019）：看護政策動向とマネジメント , 医療・病院管理研究協会「医療経営専攻課程」、(2019.9.21，東京）
11） 小池智子（2019）：地域包括ケア時代の看護管理、医療・病院管理研究協会・看護における機能連携研修（2019.11.8，東京）
12） 小池智子 (2019)：Society5.0 時代の看護、公益社団法人山梨県看護協会看護師職能研修 (2019.11.10，甲府市）
13） 小池智子（2019）：人口減少時代の看護管理，東京都福祉保健財団福祉保健局・病院経営本部・病院幹部マネジメント研修　看護（2019.11.19，東京）
14） 小池智子（2019）：第 1 回医療・介護勤務環境改善ナッジ研究会，(2029.12.1）

【報道】

1） 大竹文雄 , 小池智子．対談 Nudge で業務改善 行動経済学の知見からデザインする，週刊医学界新聞第 3285 号 p1-2（2019.6.20）

倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

宮脇　美保子　　慶應義塾大学看護医療学部　教授

A.　目標

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

臨床における看護師の倫理的実践を推進するためのリーダー養成に関する研修プログラム・教材を開発する。

B. 計画および実施過程

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラムに関する文献検討。

1）倫理的研修プログラムとその効果に関する文献を検討する。

2）倫理的研修プログラムを実施している海外施設を視察、情報交換する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

1）「看護倫理研修プログラム」の実施に向けて、研究倫理審査会で承認され、現在研究参加者をリクルートしている段階である。

2）海外視察は、3 月 10 日～ 16 日まで米国サンディエゴ医療センターに行く予定であったが、世界規模の感染問題が発生したことにより、キャンセルし次年度の課題とした。

3）看護実践における倫理に関する講演を行った。

2．今後の課題、展望

◆倫理的看護実践の推進を目指したリーダー養成のための研修プログラム・教材の開発

1） 2020 年度は、「看護倫理研修プログラム」を 4 月～ 9 月まで実施し、その後アンケートデータを分析の上、国際学会の発表準備を行う

2）海外視察を通して、効果的な倫理研修プログラムおよび実施方法について検討する。

3．2019 年度の業績

1）宮脇美保子 (単著）: 身近な事例で学ぶ看護倫理 (改訂第 2 版)、中央法規 .

2）宮脇美保子 (編著）: 基礎看護学④　臨床看護総論 (改訂第 3 版）メヂカルフレンド社

3）宮脇美保子 (共著）: 看護理論 (改訂第 3 版）看護理論 21 の理解と実践への応用、南江堂

4)　宮脇美保子 : シンポジウム :「医療倫理教育と哲学教育」シンポジスト、第 38 回医学哲学倫理学会、2019 年 11 月 10 日、奈良県橿原市

5)　宮脇美保子 : 「緩和ケアと倫理」沖縄県看護協会主催研修会講師、2019 年 6 月 5 日

6)　宮脇美保子 :「看護職と倫理」、沖縄県看護協会主催研修会講師、2019 年 7 月 3 日

7)　宮脇美保子 :「倫理に基づく看護実践」、東京都看護協会主催研修会講師、2018 年 9 月 19 日

8)　宮脇美保子 :「ケアの受け手と周囲の人への意思決定支援」沖縄県看護協会主催研修会　講師、2019 年 10 月 31 日

9)　宮脇美保子 :「看護と倫理」静岡県看護協会主催　看護教員養成課程特別講義、講師、2019 年 12 月 11 日

10）宮脇美保子 :「新人看護師のための看護倫理」横須賀共済病院看護部主催研修会講師、2019 年 12 月 18 日

11）宮脇美保子 :「看護実践の倫理」、愛知県看護協会主催研修会講師、2019 年 1 月 10 日

ケアリング文化の醸成 - 教育におけるユマニチュードの導入

宮脇美保子　慶應義塾大学看護医療学部　教授
福井　里佳　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
山本　亜矢　慶應義塾大学看護医療学部　講師
松嵜　　愛　慶應義塾大学看護医療学部　助教
小林　良子　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

◆ケアリング文化の醸成

患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施過程

◆ケアリング文化の醸成

人と人の関係性を築くことを理念とする「ユマニチュード」の理解を深め、教育・実践の場に浸透させていく

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

◆ケアリング文化の醸成

1）　ユマニチュード研修会を受講し、看護技術における効果的な教育方法の検討 (福井)

2）　患者 - 看護師間のケアリング関係に求められるユマニチュードの理念およびケアの原則を基礎看護学教育における実践

3）　職場風土と看護師のディープスマートの継承に関する研究

2．今後の課題、展望

◆ケアリング文化の醸成

1）　ユマニチュードの基礎看護教育への導入およびその効果に対する実証的研究

3．2019 年度の業績

【著書】

1）福井里佳 (共著) : 基礎看護学④臨床看護総論 (改訂第 3 版) メヂカルフレンド社

2）小林良子 (共著) : 基礎看護学④臨床看護総論 (改訂第 3 版) メヂカルフレンド社

【学会発表】

1）福井里佳 : Study of educational methods to support students' learning during the clinical nursing practicum-to shed light on the aspects of dialogue between faculty and students progressed by the faculty "asking questions"-. International Conference: How People Learn "WAZA" from the educational field of teaching and nursing ' わざ ' はいかに学べるか－学校教育と看護教育の立場から－ , 2019, 32-35.　2019 年 11 月

2）山本亜矢，寺部雄太．糖尿病足病変予防における足底装具の素材と足圧との関連：文献検討．第 11 回日本下肢救済・足病学会．2019 年 6 月 28 日（示説）

3）松嵜愛 :「手術室における看護」、日本手術看護学会、第 19 回千葉県手術室情報交換会講師、2019 年 7 月 20 日

4）小林良子・宮脇美保子 : 腰痛予防に焦点をあてた「ボディメカニクス」に関する基礎看護技術テキストの比較検討、第 39 回日本看護科学学会学術集会、口演発表、2019 年 11 月 30 日

5）渡邊敏基，山本亜矢 : Safe Patient Handling and Movement（患者の安全な介助と移動）に関する研究動向 ‐ 計量書誌学的分析 ‐ ．湘南藤沢学会第 17 回研究発表大会．SFC Open Research Forum 2019 年 11 月 23 日

【社会活動】

1）福井里佳 :「メンタルケア手法論－看護ケアの視点から－」一般財団法人メンタルケア協会研修 メンタルケアスペシャリスト養成講座 講師 2019 年 7 月及び 12 月

2）松嵜愛 :「私のキャリア」、横浜女学院中学校主催、キャリア教育講演会講師、2020 年 2 月 5 日

【その他】

1）山本亜矢．書評「松浦信子・山田陽子著『快適！ストーマ生活－日常生活のお手入れから旅行まで 第 2 版』」看護教育．Vol.61 No.1 2020 年 1 月

2）山本亜矢.「褥瘡（床ずれ）予防に焦点をあてたポジショニング　ベストプラクティス」看護医療学部オープンキャンパス模擬授業講師

外来患者に対する在宅療養支援に関する研究

永田　智子　　慶應義塾大学看護医療学部　　教授

A. 目標

本研究では、外来通院中の患者を対象とし、外来における効率的なニーズ把握とケアマネジメントの方策を検討することを目的とする。

B. 計画および実施過程

本研究は 2015 年度から文部科学省科学研究費により継続的に実施している。これまでに、外来看護師による在宅療養支援に関する全国調査、外来看護師の在宅療養支援ニーズ把握に関する質的研究とその結果を用いた調査、1 病院の外来看護師を対象とした在宅療養支援に関する認識の調査等を実施してきた。2019 年度は 1 病院における外来での在宅療養支援マニュアルについて検討すると共に、これまでの調査のまとめを実施した。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）調査結果の公表・周知

外来看護師による在宅療養支援について、日本地域看護学会でワークショップ「外来での在宅療養支援を促進するには：外来看護師の支援力向上に向けた取り組み」を開催した。また、これまでの調査についての論文が 2 編掲載され、学会発表は 1 件行った。

2. 今後の課題、展望

公表に至っていない調査データが蓄積していることから、今後さらに論文投稿を進めていく。また、現在、外来での在宅療養支援マニュアルを中心とした書籍を執筆中であり、2020 年度内の刊行を目指している。

3. 2019 年度の業績

【雑誌論文】

1. 前田 明里 , 永田 智子．外来看護師が患者の在宅療養支援のニーズに気づくための情報収集．日本地域看護学会誌，22(3)，17-25，2019

2. 劔持 麻美 , 松永 篤志 , 田口 敦子 , 明珍 千恵 , 山内 悦子 , 浦山 美輪 , 永田 智子．循環器疾患をもつ在宅療養継続者に対する病院内の多職種連携による支援に関する質的研究．日本地域看護学会誌，22(1)，35-42，2019

【学会発表】

1. 田口敦子，山内泰子，山内悦子，松永篤志，劔持麻美，永田智子．在宅療養者に対する外来看護師の電話による支援の実施状況と支援内容の実態．第 22 回日本地域看護学会学術集会，2019 年

なお、これらの研究は平成 29 ～ 31 年度基盤 B「外来患者の在宅療養支援に向けた対処方策の開発とシステム化」によって実施した。

SFC Open Research Forum 2019 への出展

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で、研究活動成果を広く社会に公開する場として開催する「SFC Open Research Forum(ORF）2019」に、11 月 22 日（金）～ 11 月 23 日（土）の 2 日間、参加しました。今年度の ORF のテーマは「Beyond SDGs ―SDGs の次の社会―」であり、各参加団体は、それぞれの研究が目指す SDGs（持続可能な開発目標）を掲げ､日々の成果を発信しました。「看護ベストプラクティス研究開発・ラボ」(以下ベスプラ）は、SDGs のうち、「すべての人に健康と福祉を」に着目し、展示発表を行いました。

当日は､プロジェクトメンバーの研究成果である｢緩和ケアに関する看護師教育の普及と効果について｣､｢がん患者中心の意思決定支援の充実と普及に向けた取り組み｣､「有料老人ホームの入居者の避けられる救急搬送・入院の減少を目指して」､「心疾患患者の不眠症に対する非薬物的介入の現状と課題」の 4 つの研究についてポスター展示を行い、ブースに訪れた方々との意見・情報交換を行うことができました。また、若手研究者による「わかばの会」では高齢者疑似体験の機会を設けました。IoT や AI などを駆使し、高齢化や多様化が進む社会の課題と向き合う他学部や一般企業の方々に、看護の基本となる “ 対象理解 ” をベースとした教育、研究、実践の重要性をシェアし、協働のきっかけを創りたいという思いから企画したものです。SFC の学生・院生、教職員の他、中高生から自治体の職員、一般企業の方など、100 名近くの方が高齢者疑似体験に参加してくださいました。体験後には、「こんなにも動きにくい、見えにくいことに驚いた」「高齢者の気持ちを想像できた」「高齢者にもっと優しくしようと思う」などの感想が寄せられました。また看護の視点や考え方にも関心を持ってくださった上で、ご自身の分野への応用を検討されていました。いただいたご意見やご感想から、今後の活動や、研究テーマの検討につなげていきたいと考えています。

2 日間を通して、ブースには SFC 所属の教職員や学生はもちろん、看護に関心のある中高校生や看護医療学部の卒業生、医療専門職や一般企業、市民など幅広い方々が足を運んで下さり、「看護」を基盤に活発な交流が見られ、ベスプラの活動や研究に関心を持っていただく機会になりました。市民の方の中には、ポスター展示への質問や説明をきっかけに、ご自分の病いの経験やご家族を看病する経験をお話しくださる方もいました。まだ掘り起こされていない「看護」のニーズを伺い、新たな看護研究の芽を見つける 2 日間でした。

若手研究者の会

わかばの会

新幡 智子　慶應義塾大学看護医療学部　専任講師
慶應義塾大学看護医療学部 助教（有期）
浅川翔子，一条由香 , 門脇 緑，木下ユリコ , 小林良子,
田久保美千代 , 田村紀子 , 平尾美佳 , 本田晶子 , 松嵜 愛 , 吉永新子

A. 目標

様々な専門分野の若手研究者が、柔軟な発想や活気あふれる行動力を基に、創造的に研究・教育に取り組み、これからの看護学の発展や大学教育の充実への貢献を目指す。

B. 計画および実施過程

・2019 年 7 月：今年度の活動方針・計画の検討
・2019 年 9 月，10 月：ORF での企画検討、準備
・2019 年 11 月：ORF でのブース出展
・2020 年 2 月：勉強会
・月 1 回：わかばカフェを実施（メンバー間での情報・意見交換）
・2020 年 3 月：Web 会議による今年度の活動評価

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）ORF への出展

2019 年 11 月 23 日・24 日に六本木の東京ミッドタウンで行われた ORF（Open Research Forum）において、SDGs（持続可能な開発目標）のうち「すべての人に健康と福祉を」に着目した看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリの展示発表の中で、高齢者疑似体験の機会を設けた。当ブースには、SFC の学生・院生、教職員（専門分野は建築や機械、農業、情報、政策など様々）はもちろん、中高生から自治体の職員、一般企業の方など、10 代～ 70 代の 100 名程度の参加があった。上下肢の関節可動域や筋力の低下、白内障による見え方の変化などを装着物により体験するとともに、実際の日常生活動作（歩行や椅子に座り、立ち上がる，着替え，新聞を読むなど）も体験して頂いた。体験後は、身近にいる高齢者の日常生活や介護の仕方への関心が深まり、自身の老後に向けた問題意識、加齢による日常生活の不自由さの実感など、様々な感想や学びが語られた。

高齢者疑似体験をする来場者と説明する教員

高齢者疑似体験装具を装着し歩行する様子

また、参加者のなかには「自分で体験して、問題を知る」という視点や看護としての考え方に関心を寄せ、自身の分野への応用を検討する方もいた。「この体験を公園づくりに生かしたい」「商品開発や行政の取り組みを考える上でも、当事者の体験は重要だと認識できた」など、他の学問分野の参加者からのコメントは、若手研究者としての今後の活動や研究テーマを検討する上で、非常に有意義なものとなった。ORF を通して、来場者と体験を共有し、看護の強みをアピールしながら、学際的なコラボレーションによりケアを開発・提供する必要性を改めて認識した。

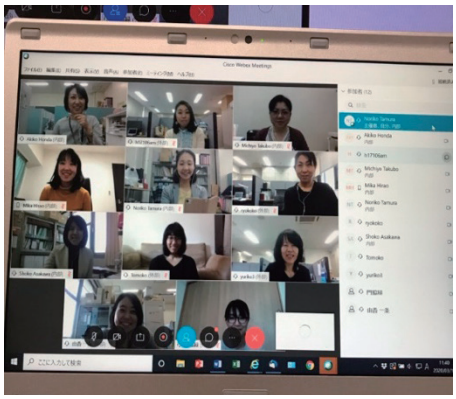
2）勉強会の開催

今年度は、「研究と教育の統合」と題し若手研究者として研究活動を促進するための方略について見出すことを目的として勉強会を企画・運営した。2 月 26 日に深堀浩樹教授よりご講義をいただいた。若手研究者として教育とのバランスを図りながら、どのようなステップで研究を進めていくかについて具体的な方略を学んだ。参加者からは、自身の研究活動について見つめ直すと共に、今後の研究活動への動機づけとなったという感想があった。

SFC 看護医療学部校舎での講義風景

3）わかばカフェ

各領域の若手研究者が、教育や研究などに関して気軽に情報交換できるよう毎月 1 回 “ わかばカフェ ” を開催している。カフェでは昼食を持ち寄り、リラックスした雰囲気の中で学会や外部の勉強会などで知り得た情報の共有や日頃の悩みの相談などを行うことができた。また、勉強会や ORF のテーマに結びつく内容なども話し合うなど有意義な機会となった。


Webex を活用した遠隔会議

2.　今後の課題、展望

①　ORF での経験を基に、すべての人に健康と福祉を届けられるよう、学際的視野を持ち看護を発信する活動を継続する。

②　若手研究者として、互いに学び合う機会を持ちながら、教育と研究の統合に向けて個人や環境の強みを活かし研究能力の向上と研究活動の推進に努めていく。